

高校生“沖縄特派員”新聞

発行：大阪いずみ市民生活協同組合 組合員活動委員会 〒590-0075 大阪府堺市堺区南花田町2-2-15 TEL:072-232-3095

vol.6



沖縄が 紡いでいく 平和



私たち高校生沖縄特派員は、9月21日から23日の3日間、沖縄の現状、米軍基地や沖縄戦に対する沖縄の人たちの思いを取材した。

1日目、米軍嘉手納基地を望む道の駅かてなとチビチリガマへ行った。嘉手納ではそこで暮らす人々の思いを、ガマでは遺族会長の案内で中に入った。当時のまま残っている内部を見ながら、今では想像もつかない悲惨な最期の様子を聞き、言葉を失った。

2日目、米軍辺野古基地建設の埋め立てが行われている大浦湾で、クラボートに乗り込んだ。波が荒れて中止となり、砂浜や公民館、話を聞いた。ここでは、基地建設によって、海底の泥が舞い上がって海の生態系が破壊されていると、基地建設への反対の声を



上げる意味を考え、その後、嘉数高台公園から米軍普天間飛行場を見、沖縄戦を体験した島袋由美子さんの話を聞いた。「あの戦争では、敵はアメリカ兵だけでなく、自分を攻撃している者、つまり日本を守ってくれる自分兵もどったので」との言葉が心に残った。

3日目、沖縄県平和記念資料館へ行き、平和の礎に込められた沖縄の人々の思いを感じた。沖縄の民間人、日本兵、米兵だけでなく、戦死した名前もわからない韓国の人たちもいたことを知り、悲しみだけでなく、戦争に対する腹だじさを感じた。

3日間、多くの人から話を聞き、戦争の怖さや戦場のリアルな人々の思いに気づくことができた。沖縄戦から80年がたとうとしている現在、ロシア・ウクライナ、ガザ地区をはじめ世界中で戦争が起き、兵士だけでなく、多くの民間人が毎日のように命を落としている。今回の取材で、次世代を担う私たちはどうすれば平和を実現することができるのかということを考えさせられた。



高校生特派員
が行く!

左から
来原 聡太さん(1年)
高橋 康太さん(2年)
安宅 優那さん(2年)
舟場 琴美さん(2年)
島 明香里さん(1年)
田中 志奈さん(1年)
小山 来実さん(2年)

「高校生“沖縄特派員”新聞」の取材・編集には毎日新聞が協力しました

揺るぎない 平和への思い



平和の礎について説明する沖縄県平和祈念資料館学芸員の大城航さん(中央)

6 平和の礎
「ここ」は、沖縄の方言で基礎(いしずえ)に由来し、ゆるぎない平和の思いが込められている。刻銘碑には、沖縄戦で亡くなった沖縄県民、沖縄以外の方々、ハンガルの名前、米国兵士の名前など、敵味方関係なく、犠牲になった一人一人の名前が刻まれていた。そこから見た海は美しい青い海。ここで壮絶な戦闘があったとは想像できない風景だった。

6 摩文仁の丘

丘の下の洞窟に日本軍の司令部があった。もともと司令部があった倉庫から南部への撤退で多くの住民が巻き込まれ、沖縄戦の最激戦地となった。



鉄血勤皇隊の壕への取材する特派員

みなさんの声をお聞かせください!



高校生“沖縄特派員”新聞vol.6
読者アンケート

司令官と参謀は洞窟の開口部近くで自決したという。丘の上には慰霊碑が建っている。丘とその周辺は平和祈念公園となり、各県の慰霊碑が数多く並び、沖縄戦で亡くなった方々の名を刻み、分と同じ世代の若者の思いを伝える。

丘から海の方へ降りた所、沖縄師範学校男子部生徒で構成された鉄血勤皇隊の戦没者慰霊碑と勤皇隊のガマがある。自分と同じ世代の若者の思いを伝える。

いを想像すると、心が苦しくなり私はガマに入る事ができなかった。戦争という広島や長崎の原爆のイメージが強い。しかし、沖縄戦は日本における唯一の県民を総動員した地上戦で、太平洋戦争で最大規模の戦闘だったことをこの新聞で私たちは知ることができた。

沖縄では戦争が終わった後も、米軍基地の集中、軍用機の墜落や騒音、基地建設の埋め立てによる環境破壊が続いていて、米兵による犯罪も起きている。

沖縄が抱えている問題を、国民一人一人が、国全体の問題として議論していかなければならないと思う。

戦争は皆を不幸にし、誰にとっても良いことが一つもない。同じ過ちを繰り返さないように、忘れてはならない歴史に一人でも多くの方が関心を持ち、この新聞を読んで沖縄の事について考えてもらえれば良いかなと思います。小山来実

でーじ好きさー うちな一日記

沖縄の風景や食べ物は、大阪での日常生活にはない、すてきなものでいっぱいだった。

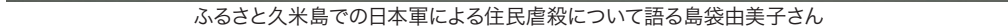
バスからはずらりと並んだ赤瓦の家が見えて、ほとんどの家でシーサーがお出迎えをしていた。また、道路の脇はたくさんハイビスカスによって赤と緑で彩られ、青空とさとうきび畑のコントラストもきれいだった。

そして、沖縄の食べ物はどれも本当においしかった！沖縄そばの優しい味や、タコライスのピリッとした甘い辛い味、ステーキからあふれ出る肉汁に、すっかりとりこにされた。また、ラフテーやミミガー、テビチなどさまざまな豚肉料理を食べて、豚を余すことなくおいしくいただくという沖縄の精神と、命の大切さを感じた。特に印象に残っているのが、ブルーシールのアイスクリーム！ホテルや国際通り、空港でも、みんなたくさん食べていた。

沖縄には、その土地ならではの風景や食べ物がたくさんあります。みなさんも沖縄を体感してみてください！

【田中志奈】





イじゃない

なった。戦争には敵と味方があり、味方が自分たちを守ってくれると信じていた。しかし、鳥袋さては、砲弾が飛んでくれば、敵が撃ったのか味方が撃ったのかは関係ないと言った。銃を向けてくるのが敵であり、それは米軍であり日本軍でもあったという。

戦争中、日本軍は「住民を守るのではなく、「国」を守った。これから先、「国」を守るため住民が犠牲になる」とは無いのだろうか。当たり前を疑ってみることも必要な

命と心を奪

② チビチリガマ

私には、1945年4月1日に米軍が沖縄本島に陸上陸空部隊にあつた。チビチリガマを訪れた。ガマは然る洞窟のことであつた。当時米軍の攻撃を恐れて、あらかじめある方へ住民が避難した。4月2日、この世のものと思ふほどの悲劇の思ひが、チビチリガマで起きた。米兵による残虐行為を恐れ、避難していた約140人のうち83人が集団自決の命を落とした。毒薬の注射、積み上

▶チビチリガマ内には
 自法に使われたとみられる遺品と遺骨が残されている



う。戦争は、人の命と心を奪い取る、最低な行為だ。少なからず、私はは大好きな人殺し合うことなど想像できない。そのような戦争が一度と繰り返されないうちに、私たちに何ができるのか。私自身、民間生活を続けていきたい。

【田中素奈】

⑤ スパイに疑われた島袋由美子さん
沖縄戦当時6歳で、沖縄の離島・久
米島に住んでいた島袋由美子さんから
「住民虐殺」の話を聞いた。

久米島虐殺の記憶

軍隊は住民を
守らなかった

久米島では、空襲はあったが沖繩本島のような地上戦はなかった。1945年6月23日に沖繩戦の組織的戦闘が終了すると、26日に米軍が上陸してきた。日本軍の久米島守備隊（海軍通信隊は40人ほどで、鹿山正隊長は島民に米軍との接触を禁じた。しかし、上陸してきた米

軍は友好的で接触する島民もいた。隊長らは、米軍と接触した人々をスパイとみなし、島民約20人が殺された。その中には島中をまわって鉄すなどの回収をしていた朝鮮出身者の一家人も含まれていた。

鳥袋さん一家も米軍と接触があったためスパイとされた。

恐ろしさを実感させたいという言葉に、戦後の高橋康

この出来事が世に知られたのは戦後38年たってから。生き残った方や遺族の思いをくみ、その人たちが話すまでは黙っておこうという地域の人々と那覇嗣さんは語った。亡くなった人の心だけでなく、遺族の心まで奪ってしまう出来事だったのだ。

9月21日 1日目

① 米軍嘉手納基地
(道の駅かでな)

② 読谷村
チビチリガマ

9月22日 2日目

③ 辺野古基地建設の
埋め立てが進む大浦湾

④ 米軍普天間飛行場が
望める嘉数高台公園

9月23日 3日目

⑤ なは市民活動支援センター
(久米島住民虐殺の証言)

⑥ 沖縄県平和祈念資料館
平和の礎



のリストに入れられ、い
つ殺されてもおかしくな
かたという。

8月15日に終戦の玉音
放送が流れても、隊長は
日本の敗戦を信じず、9
月に沖縄本島から上官が
やってきてようやく降伏
した。

島袋さんは「沖縄戦で
は軍隊は住民を守らな
かったという事実があり
ます。戦争をするという
ことばかりでいらいがも
っと考えなくては」と

垂れてゐる水が涙のように感じ、一步、一步が重たくなつて感ぜられた。割れてしまつた生活用品や鉢、大きな遺骨、そして子供のもの、思つたより小さな遺骨も落ちていた。

当時、與那覇さんゝの母は別の場所になが、実家の家族がヒチリガマで亡くなつた。それを聞いた母は、子供たちを連れて回海で入水自殺をはかつたという。あのとき母が暗みちまづいてい

知
つて
ほ
し
い

沖縄の声

日本政府が米軍辺野古基地建設を進める大浦湾。台風で工事用船舶は避難していた

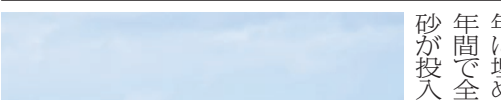


⑤ 辺野古基地建設で埋め立て進む大浦湾

米軍辺野古基地建設推進のため、大浦湾の埋め立て工事が進んでいる。大浦湾は、海軍の練習艦隊の母港として知られており、海軍の練習艦隊の母港として知られている。大浦湾の埋め立ては、海軍の練習艦隊の母港としての機能を失ってしまう。大浦湾の埋め立ては、海軍の練習艦隊の母港としての機能を失ってしまう。大浦湾の埋め立ては、海軍の練習艦隊の母港としての機能を失ってしまう。

普天間飛行場は宜野湾市の中央にあり、「世界一危険」と言われる一帯。実際に嘉数高台公園の展望台から飛行機を見ながら、すぐ近くに住宅街や学校があり、とても驚いた。


その普天間飛行場は、1995年に起きた米兵による少女暴行事件を受けて、全面返還が決まった。その移転先については、県内の全市町村長や議長が県内移転断念を求める建白書を2013年1月に政府に出したが、その年の12月に当時の知事が承認。その後、埋め立て反対を訴え当選した知事が誕生したが、18年に埋め立てが始まり6年間で全体の約15%の土砂が投入された。



海の底に「マニラ」を
並み」といわれ、歌弱な
地盤が見つかる。地盤改良
も必要になってくる。こ
れから、時間と費用も増
えるといふ見方だといっ
ていた。私はずこまにし
つくる必要があるのか
守るべき「ホ・ラ・ブ
」に認定された。海で
自然破壊をしてしま
なければいけないとい
のかと思った。

松井さんは「一番辛い
のは、政府に話聞いて
もらえないこと」と話
していた。辺野古の地
立て問題で多くの人
知ってもうひとつ
「自分事」として考
てほしいと思った。

【島明倉里】



嘉数高台公園から望む米軍普天間飛行場

「希望の海」を守る

も、晩も窓明で起きているという。これが自分だったら眠れなと思う。

基地のある場所は、元々水源がある豊かな土地で、人々の集落のあるところだ。たいてい、基地場所だ。たいてい、基地のすぐ近くにはたきやりの学校、公民施設があり、そこには地域の人々の暮らしていると思うところがある。気持ちになった。

米軍普請、開飛行場の辺り、野古移転工事が始まっていて、実際、辺野古の埋め立て、現場なども見た。基地の場所を定めては、問題はあっても、住民の方々は、どこに基地があっても、被爆を受けるから、その苦しみはなすすことだ。が大事だ。

そもそも戦争がなければ、米軍基地が沖縄にくるのとはなかつた。

嘉手納の日に平穩を

①嘉手納基地
米軍の基地が沖繩にあるのは知っていたが、墜落の危険性だけでなく、騒音被害があることは初めて知った。嘉手納基地を見るのができる道の駅

でなく、基地の騒音被害を高架下で聞くと伝えている方々に話を聞いた。戦機は平日に離着陸し、土機はあまり飛ばないといふ。今回の嘉手納基地取は土曜だったため、戦

普段走っている電
音を高架下で聞くと伝
デシベルで、基地周
騒音の平均は約85～90
シベルという。また
「爆音。耳をよぎる」
なるような騒音被害

いと見つめ、受け止めて、これからにふなげることのできる。戦争を二度としないという強い意志を一人一人が持ち続けることが大切だと思う。

【舟場琴美】

沖縄から学ぶ教訓

ら蹴って「おがー痛い！」と叫びてその学生に「一方、札を回すという自衛的なきじめが多発していたという。沖縄での戦争などは、方言を使うことはフバイとみなされた」ともあった。

また、米国の優遇した日本地位協定を改定しなければ、沖縄で起っている米兵の事件を解決することではできないといわれた。

「同様の地位協定を米国と結

んだ国々では、改定したので、日本でも改定できるはずだ」といって争聞いた。この話は石沖様だけでは、米軍基地がある日本本土に関わりがある。10月に石破茂内閣が成立したが、石破首相は日米地位協定の改定を主張してどうもあつたので、今後、日米地位協定についてくわしく調べて、石沖様だけではなく日本でもとてて考えてみたい。【森原聡太】